

青丘文庫 月報 No.113

1996年12月1日発行

＜発行人＞ 〒654 神戸市須磨区須磨寺町4-3-1 メゾン・ド・青丘内 青丘文庫
韓 哲 暉 TEL/FAX 078-735-0220
＜編集人＞ 〒657 神戸市灘区山田町3-1-1 (財)神戸学生青年センター内
飛田 雄一 TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878



【巻頭エッセー】

インターネットと朝鮮研究・体験的雑談

水野 直樹

最近インターネットに少しばかり凝っている。毎日のように「インターネット」だの「イントラネット」だと言っている世の中に、私も巻き込まれたのかもしれない（といっても「インターネット」と「イントラネット」はどこがどのように違うのか、まったく知らないのだが）。

今年の春、研究室に新しいコンピューターを導入して、それまで壁からブラブラしていた学内LANのケーブルを接続した。電子メールとインターネットが少しできればよいかな、と思って、夏前からいろいろ試している。電子メールの便利さは言うまでもないことかもしれない。実はこの原稿も締め切りが過ぎてから書いているのだが、電子メールで編集長の飛田氏あてに送ることにしている。瞬時に届く電子メールは、原稿の締め切りに追われる身にはたいへんありがたい。といっても、締め切りがどんどん遅くなるだけかもしれないけれど。

インターネットの方は、考えてもいなかったくらい便利である。以前はこれでどんな情報がどれくらい入手できるか疑っていたが、使ってみるとなかなか役に立つ情報を得ることができる。朝鮮・韓国関係の情報を手に入れるにはどうすればいいのか、はじめのうちはわからなかったが、その道の先達に聞いたり、自分でもあちこちにアクセスして試しているうちに、ようやく自分の研究・関心に合うホームページのいくつかに出会うことができた。

まず最初は、朝鮮・韓国や在日韓国・朝鮮人のことに関心を持つ人ならほとんど誰もが（インターネットを利用する人に限られるが）知っている「ハン・ワールド」をあげなければならない。大阪大学の金明秀氏が運営しているホームページだが、朝鮮関係の学術情報に力を入れている。六月頃だったか、この「ハン・ワールド」に『むくげ通信』に連載されている「書誌探索・朝鮮に関する論文・記事」をのせれば、日本での朝鮮研究の学術情報としていいものになるのでは、と思い付いた。そこで金氏に電子メールでそのアイデアを知らせたところ、金氏は早速むくげの会に連絡をしてデータを入手し、検索ができるようにして、「ハン・ワールド」にのせたのである。

『むくげ通信』連載の書誌探索も貴重だが、検索ができるようになったので、数年分のデータから必要な文献を探すのは「ハン・ワールド」の方が便利なので、よく利用している。

次に利用するようになったのは、韓国の図書館の文献検索サイトである。国立中央図書館やいくつかの大学図書館では、目録検索をインターネットを通じてできるようにしている。これらにアクセスすれば、関係文献の情報を入手できる（もちろん閲覧

するには韓国に行くか、コピーを頼まねばならないが)。慶星大学の図書館では雑誌論文のデータベースも検索できるので、研究テーマに関わる論文を知ることができる。ただし、同大学所蔵雑誌に掲載されたものに限られるという難点がある。どこか韓国の図書館・所がすべての学術情報をデータベースとして提供してくれないか、と思っている。

ごく最近利用しはじめたのは、韓国の新聞社のホームページである。毎日の新聞を読むわけではなく、記事検索を利用している。東亜日報、朝鮮日報、ソウル新聞、京郷新聞あたりが記事検索システムを提供しているが、いまのところいちばん使いやすいのはソウル新聞のようである。

二日ほど前、ソウルの友人が交通事故で死んだという知らせをもらった。彼は大学で教える歴史研究者で、私と同年齢、研究テーマも新幹会だったので親しくしていた。歴史家であると同時に、中堅の小説家としても有名だった。新聞に記事が出ているだろうと思って、ソウル新聞で記事を検索したところ、やはりタクシーの三重衝突事故で死亡した、という記事が出ていた。電話で知らせを聞いた時には信じられなかったが、新聞の記事を見ると信じないわけにはいかない。コンピューターの画面を見ながら、しばらく重く暗い気持ちを拭うことができなかった。

参考のために、以上のホームページのアドレスを書いておく。

HAN - Korean Residents in Japan <http://www.han.org/a/>

国立中央図書館 <http://203.237.248.5/>

慶星大学図書館検索 <http://kulis1.kyungsung.ac.kr/search/index.html>

ソウル新聞記事検索 <http://www.seoul.co.kr/db/search1.htm>

(みずの なおき/E-mail mizna@zinbun.kyoto-u.ac.jp)



「満洲」の朝鮮人民会について

— 間島の十八ヶ所民会を中心に — 広岡 浄進

在満朝鮮人史研究はこれまで、その対象が抗日運動にかたよってきた。しかし日本の侵略史の全体像解明には、親日派の歴史的位置づけは不可欠である。本報告は、その解明がまだ充分とは言えない親日団体・朝鮮人民会(以下「民会」)についての考察である。

1909年の間島協約により中国領とされた間島(現在の延辺朝鮮族自治州)は朝鮮人が人口の大半を占め、朝鮮植民地統治上にも、中国侵略の足がかりとしても、間島における朝鮮人の統制把握が日本にとって重要な課題であった。そのため、朝鮮人に対する統治の補助機関として、1917年に民会が組織されたが、1919年三一運動の昂揚のなかで活動停止に追い込まれる。しかし1920年間島出兵における独立運動弾圧のもと、それまでの民族主義者をも巻き込むかたちで民会は再編強化され、1921年には領事館警察の分署所在地十八ヶ所に民会が成立、本格的活動を開始する。

民会には外務省と朝鮮総督府から補助金が支給され、その活動全体の監督は領事館が、教育・医療・獣疫予防などの事業の運営は総督府が担当した。その活動のうち教育や附設金融部などの事業は日本側が懐柔政策として用意したものであるとはいえ、同時に民会から同様の内容の要求が提出されていたことには注目すべきである。しかしこれらは、量としてはとても全体に行き渡るものではなく、金融部にいたっては一部地主のみを融資対象とし、民会の「細民救済」への期待と逆に機能する始末であった。

1930年間島五三〇暴動では、民会は「日帝走狗」とみなされ襲撃される。また中国

官憲による排日の一環として朝鮮人移民迫害も激化し、十月には民会に対抗して親中派朝鮮人を組織した延辺自治促進会が設立される。この状況のもと、民会は領事館に対し徹底的保護を要求する。だがそれは幣原外交のもとでは受け容れられず、遂に十一月には各民会とも総辞職、閉鎖に走る。翌31年には暴動は収束し、活動を再開した民会は三月、再び在満朝鮮人の保護徹底を日本に求めるため、東京への陳情に踏み切る。並行して在間島総領事より「共匪ニ因ル被害朝鮮人ノ救済案」が出されているが、民会の不満に応えるものではなかった。民会と領事館との関係悪化は、本質的解決を見ぬまま、満洲事変を迎える。

事変後は民生団に参画して間島の自治区化を請願したりもしているが、統治の一翼を担われつつ、1937年に満洲帝国協和会に合併されてその姿を消す。

民会は、朝鮮総督府からは朝鮮人統制を、外務省からは「日本」勢力扶植を託された団体であった。そのなかで民会は、領事館に対し、一貫して在間島朝鮮人の生活基盤安定策を求めてきた。しかし日本側が「懐柔政策」としたその事業は、間島の朝鮮人全体を潤すにたる量ではなく、結果、民会の企図とは裏腹に、一部の朝鮮人を潤すにとどまった。そのことはかえって民会を間島の朝鮮人社会から浮き上がらせ、民会は遂にはより尖鋭的に日本の保護を叫ぶしかなくなったのである。

Michael Weiner氏の在日朝鮮人史研究をめぐって

松田 利彦



M・ヴァイナー氏（現・英同シェフィールド大学東アジア研究部リーダー）の手になる二つの著書、*The Origins of the Korean Community in Japan, 1910-1923*（『在日朝鮮人社会の起源、1910～1923年』以下 *Origins* とする）と *Race and Migration in Japan*（『日本帝国における民族と移民』以下 *Race* とする）を紹介した。

Origins では、日本人の朝鮮観の形成過程と、朝鮮人渡日の背景が書かれ、次いで朝鮮人労働者募集の実態やその出稼ぎ労働者の性格、在日朝鮮人の労働市場最下層への流入などが論じられている。在日朝鮮人労働者・留学生の運動の、日本人との連帯、組織力、思想傾向なども分析されている。関東大震災時の朝鮮人虐殺については、特に日本政府の責任が追及されている。

二冊目の *Race* では、日本では、「家族国家観」を核とした国家主義の形成、それに基づく民族としての優越感が帝国主義膨張・民族差別の基盤にあったと主張している。1925～1938年を一つの時期として在日朝鮮人の動向が検討されており、昭和恐慌期の朝鮮人が経済的脅威だという論への疑問、協和会の位置づけ、在日本朝鮮労働総同盟の成立要因と解消過程、などが論じられている。強制連行の「強制」という用語使用に留保をつける問題提起もされている。

以上紹介した二冊の書は、第一に英語圏の研究者による在日朝鮮人史の通史としては久々かつ最新のものであるという点、また、第二に、評価の均整がとれていること、第三に特に *Race* において、日本人の（在日）朝鮮人観を日本社会の性格・構造と関連させてモデル化しようとした点、などにその意義を認めることができる。その一方で、関東大震災を「分水嶺」とし、1925年から38年までを一時代として括る時期区分が妥当か、著者は *Race* において、ナチス・ドイツ流の優生思想、純血主義を、日本の植民地主義の中に読みとろうとしているが、そのような論理が主流だったといえるか、等の疑問も感じられた。

研究会のご案内

第157回 朝鮮民族運動史研究会

1996年12月15日(日) 午後3時30分

報告者 金 基 旺 氏

テーマ 「1910～1920年代の留学生問題」



- 阪急六甲より徒歩2分
- JR六甲道より徒歩10分
- 新幹線新神戸よりタクシー15分

第185回 在日朝鮮人史研究関西部会

1996年12月15日(日) 午後1時30分

報告者 杉尾 波美子 氏

テーマ 「1930年代の神戸市林田区における在日朝鮮人の生活」

会場は、いずれも神戸学生青年センター(地図参照)

(阪急六甲下車、北東徒歩2分、Tel (078)851-2760)

青丘文庫館長・韓哲曦先生は喜寿を迎えられましたが、この度神戸市より「神戸市文化活動功労賞」を授賞されました。下記のとおり授賞記念パーティが開かれます。参加されるかたは、飛田までご連絡下さい。

日時 12月21日(土)午後6時30分

場所 神戸YMCA 4F 宴会場(三宮駅より北へ徒歩10分TEL078-241-7205)

会費 5000円(記念品代1000円を含む)

97年1月4日～9日、青丘文庫内の研究会のひとつ「韓国キリスト教史研究会」(現在休会中)の友好団体である「韓国キリスト教史研究所(ソウル)」の金興洙、チェ・ギヒョン、徐正敏、韓圭茂の4氏が来日されます。

1月6日(月)午後4時より神戸学生青年センターで研究会を開きます。

発表「1980年光州事件と韓国キリスト教」(金興洙)と討論です(通訳つき)。

会終了後、午後6時～六甲苑で懇親会を開きます。ご参加ください。

今後「研究会」の予定

97年1月12日(日) 堀内 稔(在日) 鹿嶋 節子(民族)

『月報』巻頭エッセーの予定(原稿メ切は、前月の25日です)

97年1月号(藤永 壮) 2月号(高木伸夫) 3月号(浅井良純)

4月号(堀内 稔) 5月号(飛田雄一)



(※ 編集長・飛田雄一の E-mail は、MXI01010@niftyserve.or.jp です。)